

らかに佛典を引用せるものあり、兩者の關係は曾て想像せられしよりも遙かに親密のものなるが如し、此經中にも次に記するが如く「化佛」、「如來」等の文字の使用せらるゝものあり、彼の開元二十年の勅に「末尼本是邪見、妄稱佛教」、(佛祖統紀第五十四)と見ゆるものは、能く其の實狀を寫せるものなるが如し。而して支那に於る此宗教の生命は、ほど回紇民族の唐に於ける勢力と相伴ひたるものにして、從がつて僅かに百年内外に過ぎざるが如きも、然も其の間大歷年間には荆、揚、洪、越等の諸州に摩尼寺の建設あり、(佛祖統紀第三十九、第五十四)元和二年にも太原府、河南府等に寺の建立せらるゝありて、(舊唐書十四卷)其の教線は北方諸州は勿論、南方も今日の湖北、江蘇、廣西、浙江等に迄及びしものなれば、其經典の翻譯せられしもの決して少からざりしなるべく、彼の宋の良渚が記する處に據るも、佛佛吐戀師、佛說啼淚、大小明王出世經、開元括地變文、齋天論、五來子曲等の經の存せしを知る可く、(佛祖統紀第二十九)此殘經中にも應輪經、寧萬經等の名見え、殊に又た經典の轉寫は佛教に於ると等しくマニ教にても之を獎勵したるものなること、此經に見ゆるが如くなれば、(後出)唐代には之が存在決して少々には非りしならんも、今日もとより其の一部の存殘をも知る可らず。而して今初めて敦煌の石窟より、僅かに此缺佚の一篇と、先年既に發表せられたるペイオ (Pelliot) 氏の得たる斷片一葉 (燬煌石室遺書)とを得るに至りしに過ぎざるなり。而して漢譯のマニ教經典としては勿論、トルコ語ソグト語等に翻譯せられたるものにして、今日に發見せられたるものゝ中にも、未だ此殘經の如く其內容の貴重にして且つ長篇に亘るものありしを聞かず、其の一々の精細なる研究は之を他日の發表に期せんも、とにかく今余は之を推奨して以て東方摩尼教の至寶と稱せんとす。夫れ然り則ち先きに見たる世界創造説等の外に、此宗教々義の上より最も重要なりと認むべき一節を茲に轉出して、未だ殘經を見ざる人に対するは決して